

17. 新田開発 (きょう土を開く)

昔から米はたいへんき重なものでした。人々は、少しでもたくさんの米をしゅうかくするために大変な苦勞をしてきました。



東之狭間池

1. 新田用水

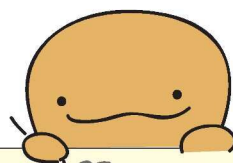
古くから美旗地区は「三野」「身野」「をばた野」とよばれた一面の野原で、水を引くことがむずかしく長い間水田がつくられていませんでした。伊賀のぶ行をしていた加納直盛は、伊賀の国には田畑が少ないので、もっと田畑を開こうと思い、あちこちを見て回りました。そこで目をつけたのがこの土地です。ところが、ここは小高いおかの上であって川が流れていません。水田にするには、なんとかして水を引かなければなりません。



大池あと

そこで、近くの滝之原と上小波田に二つの池をつくる計画をたて、伊賀中からのべ2万9千人を集め、1655(明暦元)年に工事にかかりました。こうしてできあがったのが、東之狭間池と大池です。

しかし、苦勞して作った大池のていぼうが大雨のために切れたり、東之狭間池の水が足りなかったりというなやみがありました。また、直盛もなくなってしまいました。そこで、直盛の子直堅は池から水を引くことをあきらめ、約14kmはなれた伊賀市高尾にある前深瀬から水を引く計画を立てました。ここで活やくしたのが土木ぎじゅつにすぐれていた西島八兵衛です。



今のような道具や機械がなかった時代に、どのようにして用水路をつくったのでしょうか。調べてみましょう。



新田用水



工事は大変むずかしいものでしたが、約2年かけて用水路をみごとに完成させたようです。それが今の新田用水です。

また、大切な水をどの田にも同じように入れるために「戸帳」を作りました。そこには、水を取り入れる「水戸口」の大きさや水を入れる時間が書かれています。



戸帳



美旗小学校前の日時計



用水路のしゅう理、見回りをしている水利組合員



新田用水にかかわる人々は、どんな願いをもっているのでしょうか。



このように、新田には水を大切にしてきた歴史があり、げんざいも水利組合のみなさんがしゅう理をしたり、見回りをしたりしながら用水路を守っています。

2. 矢川水路

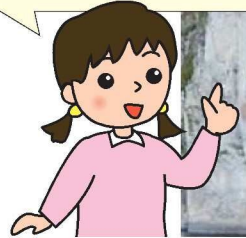
矢川地区では、ため池をつくり水田に水を引いていました。江戸時代になると、人々はさらにたくさんの米を収穫できるように水田を広げたいと考えました。

そのためには、たくさんの水が必要です。そこで、村人が考えた方法は・・・



木でできた「おけ」をつなげた水路を使って水を引いていたそうだよ。

「熊岩」にある小さいあなは、いったいなんだろう。



熊岩

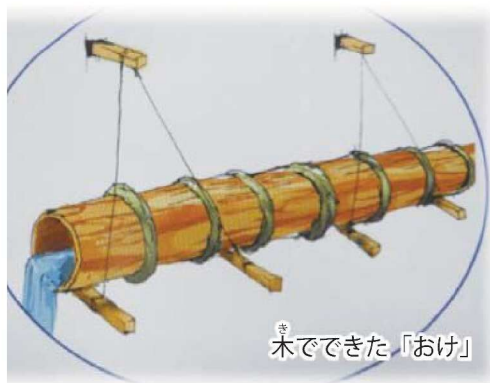
矢川の人たちは、近くを流れる宇陀川から水を引こうと考えましたが、と中にだんがいぜっぺきの熊岩といわれる岩があります。そこで、がけにそって木の水路をつくりました。

木でできた水路は、長持ちしません。しゅう理をしなければならないことがたびたび起こりました。そこで、1885（明治18）年、村人はだん結しお金を集め、水路を通すためのトンネル工事を始めました。岩をくだく工事はとてもむずかしく、費用もたくさんかかります。と中で

「やめてしまおう」という人も出てきました。しかし、村人は力を合わせ、3年の年月をかけてトンネルを完成させました。



木の水路



木でできた「おけ」



水路を通すためのトンネル



げんざいの用水路

トンネルは長さ127m、はば75cm、高さ1.3m。かなり大きなトンネルだね。

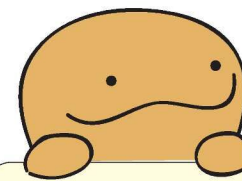


平尾渠水

3. 平尾渠水

むかし、平尾は広い野原で、それを村の人々が開たくして田畑にしました。ところが、平尾は土地がもともと高く、毎年かんばつのひ害を受

けていました。平尾村の年より役であった市橋武助は、何とかして名張川の水を引こうと上流にある比奈知村の庄屋大道寺好義に相談しました。好義の協力のもと、研究を重ね、1853（嘉永6）年に藤堂藩からきよかをもらうことができました。次の年には工事に取りかかりましたが、山をけずって岩をわり、つつみをつくりながら進まなければなりません。完成までに18年もかかりました。



昔の人々が苦勞してつくり上げた用水路が今でも大切に残されているんだね。

【→P45,73】